

令和 5 年 2 月 27 日

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究 A	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
612300	
選定番号	A140

代表者 校園名： 大阪市立難波中学校
 校園長名： 鍋谷 賀都緒
 電 話： 06-6562-4477
 事務職員名： 川地 幸子
 申請者 校園名： 難波中学校
 職名・名前： 首席 平島 陽介
 電 話： 06-6562-4477

令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和 4 年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	継続研究（2年目）	
2	研究テーマ	子どもも大人も安心できる「学びの場」の構築				
3	研究目的	昨年度取り組んだ「多様な性と学校課題」の研究において、子どもの学びはもちろんのこと、前提として大人が失敗を恐れず活発に発言できる安心感がある、「心理的安全性」を確保することで有意義な学びが生まれるという経験をした。そこで、今年度は多様な性にテーマをしづらのではなく、人権教育の根底にある「安心感の醸成」という要素に着目し、子どもと大人の「安全・安心な環境」を構築する取り組みを行いながら、同時に学びを深めることを目指す。若手の教員が例年以上に多い本年度の本校において、人権教育推進委員会を「学習会」の場と位置づけ、本校の人権総合学習の4つのテーマ「平和学習」「国際理解学習」「特別支援学習」「多様な性」について、系統立てたカリキュラムを構築することが第二の目的である。「安心感の醸成」と、カリキュラムデザインを同時に進めることにより、今後教員が変わっても持続可能に、積極的に学び続けることができる環境を作ることを目指し、2年目の研究としたい。				
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSゴシック 9.5pt ピント）</p> <p>本年度、新任・講師・新着任教員の割合が 67% となった。日々の授業と生徒対応、悩み相談等を回しながら昨年度の取り組みを引き継ぐことは困難であり、多様な性の取り組みは当初計画を変更せざるを得ない状況となった。</p> <p>とはいって、これはどの学校現場でも起こり得る時代の流れであると考えられ、生徒の精神面の不調や集団に入れない状況は高止まりであることから、夏休みを活用して広島県・福山市の中学校 2 校のスペシャル・サポートルーム（校内フリースクール）を見学に行き、生徒にとっての居心地の良い部屋を整備し、運用する方向に切り替えた。</p> <p>自習ブース、パーティションで囲った個室ブース、聴覚過敏で集団に入れないとされる生徒も多いためヘッドフォンなどオンラインしやすい環境を整えて自分のペースで進められる自習ゾーンを作り、“さざなみルーム”と名付けた。一方で、絨毯をしき、地域からソファの提供も受け、余っていた書棚にほっとできる書籍等を購入・配架して、第二図書室兼落ち着いてゆっくり過ごせるゾーンを作り、“ひだまりルーム”と名付けた。</p> <p>突発的に教室になじめなくなる生徒、継続的に教室登校が難しい生徒を中心に日中部屋を開放し、異年齢混合で過ごせるように集会で若手メンバーから提案をしてもらった。進路に悩む生徒やサポートを必要としているが人員不足で見られない生徒も過ごすことができている。また、完全な不登校状態にある生徒が放課後にきて過ごせている。</p> <p>人員としては、主幹図書司書、サポーター、スクールカウンセラーなどがメインの担当になり、人権教育主担と入る形を基本とし、担任や学年教員などが時々に応じて入るような仕組みを検討し、現在進めている。日頃図書に触れないような生徒がゆっくり本を読んだり、不登校生が過ごせる環境になっている。</p> <p>次年度に向けて、異学年混合で朝登校時、放課後、テスト前などに自習をしたい生徒に開放すること、日中は使用をしたい学年の教員間で連携しながら自習・オンライン学習やはじめない生徒の過ごす部屋として柔軟に使用することで、多くの別室を作ることなく教員負担も抑えながら生徒が安心して過ごせる部屋とすることを目指し、課題の検討も重ねる。</p>				

		研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。							
5 研究発表等の日程・場所・参加者数	日程	令和5年2月8日	参加者数	約7名					
	場所	難波中学校							
	備考	図書室、さざなみルーム・ひだまりルーム							
大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。									
<p>【見込まれる成果1】 人権総合学習の各分野について、発達に応じた教材や講師選定をし、系統立てたカリキュラムデザインを構築する。また、教科を横断して「平和」「国際理解」「特別支援」「多様な性」の観点で貫き、研究で得た視点を持ち教科授業にも関連付ける。</p> <p>《検証方法》 事後教員アンケート「人権総合学習の各分野について、昨年度と比べ、適切な時期に相応しい内容が実践されたか」「授業実践しやすかったか」等の項目に対する肯定的回答が80%以上</p> <p>〔検証結果と考察〕 各学年より選出されている人権教育推進委員会12名に対して行った調査により、①「平和」②「多文化共生」③「特別支援」④「多様な性」に加え、地域についての学習等を系統立てて実施することができたとの意見が100%であった。また、②、③、④については研究グループの教員がそれぞれ研修担当者となり、各種資料を活用しながら学習会での検討を経て、全教職員にすべてのテーマで研修を実施することができた。</p>									
<p>【見込まれる成果2】 視察や講師招聘のプログラムにより、教員相互の対話を通じた安心感のある「学びの場」の構築</p> <p>《検証方法》 「自分の意見を言ってもいいと思える雰囲気がある」等の事後の教員アンケートを実施し、肯定的回答が80%以上</p> <p>〔検証結果と考察〕 7月の講師招聘の対話プログラム、8月の広島視察と、グループメンバーは異なるものの、主体的に本校の課題に向き合うことができ、その後の校内フリースクールの整備や教職員への理解増進研修の実施、生徒への周知等の役割を担うことができた。その過程では自身を持って取り組むことができたと答えた教員が60%程度であった。新任・講師・新着任の教員が多いことから、なかなか自信を持って取り組むことには壁を感じているが、それらの意見を率直に表現できていることも、ひとつの成果と考えている。</p>									
<p>【見込まれる成果3】 講師招聘により、定期的に学びと居場所となる「放課後サロン」を開く取り組みを進める。参加は生徒・教員とも自由参加の形式にて行う</p> <p>《検証方法》 生徒（参加者）の感想により、心の状態や変化がポジティブに現れる 教員（参加者）の感想により、安心感を保つ空間づくりの学びにつながったか</p> <p>〔検証結果と考察〕 講師の都合と、上記の本校教員構成の課題から、講師招聘による放課後相談サロンを開くことはできなかった。一方で生徒への効果があることは前年度確かめたところであり、次年度以降、教員に余裕を持った体制が構築されたときに、実施を検討していく。</p>									
6 成果・課題									

研究コース

A グループ研究A

選定番号

A140

代表校園

大阪市立難波中学校

校園長名

鍋谷 賀都緒

	<p>【見込まれる成果4】 昨年度実施した「多様な性」の実践授業を講師とペアで行い、生徒の多様性に対する考え方を広げる</p> <p>《検証方法》 事後アンケート調査、主体的にテーマに取り組んだ生徒が80%以上</p> <p>〔検証結果と考察〕 多様な性のペア授業に関しても、成果3と同様の課題により実施できなかった。代わりとして、講師による出前授業を2学年に実施したところであり、その後の個別相談には10名程度の生徒が訪れていた。次年度以降、形態を考えて実施を検討していく。</p> <p>【見込まれる成果5】 「いのちを大切に思える（平和学習）」、「他の国や人種について理解が広がる（国際理解）」、「障がいへの理解（特別支援）」、「ジェンダーやバイアスの理解（多様な性）」などの人権課題について取り組みや教材研究を進める過程を通じて、生徒も教員も理解が深まり、他者尊重の人権感覚が高まる</p> <p>《検証方法》 運営に関する計画と関連する学校評価アンケートの人権課題部分や、生徒向け事後アンケートの肯定的回答が80%以上</p> <p>〔検証結果と考察〕 学校評価アンケートにより、生徒は97%、教職員は100%がいのちや他社理解、人権学習に対して肯定的に学びを深めていると回答していた。ジェンダーバイアスについては、単発の取り組みで理解が深まるることは難しいため、3年間の系統立てた性教育の中で少しずつふれていく必要があり、教材の中身の工夫・講師の方を呼ぶしていく必要がある。</p> <p>【研究全体を通した成果と課題】 具体的に記載してください。</p> <p>【成果】</p> <p>①個別に課題を抱えた生徒が落ち着いて校内で過ごせて、成績等も見取ることができる選択肢を増やせた点。 ②部屋で迷惑をかけないというルールへの約束のもと、異年齢混合にすることで、日中や不登校の家庭訪問等にかかる対応教員の数や時間の負担を減らすことができた点。 ③第二図書室としての機能を持たせることにより、読書をする人数や機会を自然と増やすとともに、読書による精神面・学習面の効果を得られる点。</p> <p>【課題】</p> <p>①評価に対する家庭の理解は、丁寧に懇談等を通じて進める必要がある点。 ②教職員の理解増進を図り続けなければ、一部の担当者任せで生徒をしっかり見られない担任や教科担当者が出てきてしまいかねない点。 ③運用について見直したりする際の集約者をがんばる先生の取り組みが終わったのちに、どの役職の教員が担うのがよいか不明瞭である点。</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>様々な不安を抱え、教室に入りづらかったり、フリースクール等と連携できなければ、家庭背景にもより不登校になってしまう子どもたちの居場所として運営できた。これにより、不登校の家庭訪問などによる教員の負担を減らし、直接、子どもたちの様子を学校で確認することができ、また、子どもたちの精神面の安定にも貢献できた点が評価できると思う。</p> <p>今後の課題は、教職員の共通理解をなお一層進めるとともに、サポートルームの運営のための人材を確保することである。また、オンライン授業などをはじめ、個別最適化された教科の授業体制をさらにすすめ、適切な評価をおこなう必要がある。</p>
6 成果・課題	